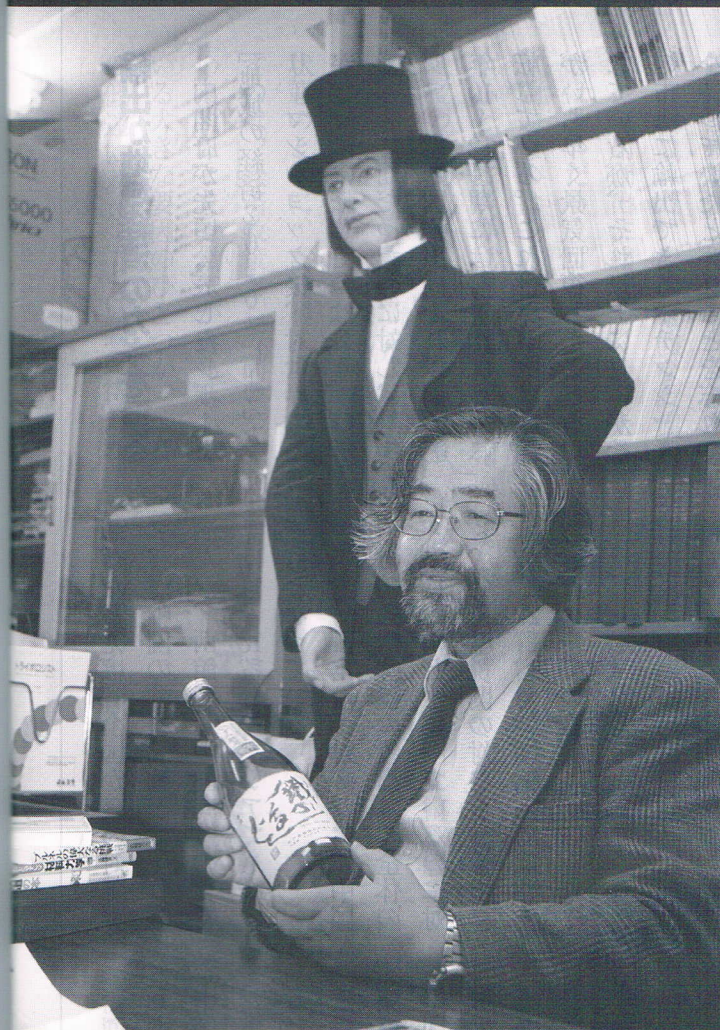




千葉大学大学院都市環境システム学科
准教授、洗楓座代表

佐藤建吉

佐藤建吉 [さとう・けんきち]

1950年4月山形県鶴岡市生まれ。1979年3月東京都立大学大学院機械工学専攻修了。千葉大学大学院都市環境システム学科准教授。著書に『トコトわかる鉄道の本』（編著、日刊工業新聞）、『プルネルの偉大なる挑戦』（日刊工業新聞社）など

ローカル線と地酒のコラボレーション!! 全国共通銘柄「鉄の道」で沿線再生!!

「ローカル線と日本酒を同時に元気にしたい」。そんな志を持った取り組みが、千葉県のいすみ鉄道で誕生した。千葉大学の佐藤建吉准教授が考案した全国共通銘柄「鉄の道」がそれだ。今後は全国各地のローカル線と蔵元とタイアップしながら、順次、同様の銘柄を発売していくという。さっそく、佐藤准教授にその独自性タプリの取り組みについて聞いてみた。

「鉄の道」を売り出して
沿線経済を盛り上げる

編集長 千葉大学ではどのような研究を行っているのですか。

佐藤建吉・千葉大学大学院都市環境システム学科准教授 風力発電をはじめとする自然エネルギーを利用できる技術づくり、社会づくりの取り組みを行っています。ちなみ

に、以前は金属疲労での「き裂の発生と進展」に関する研究を専攻していました。金属疲労という切り口から、ひとつの装置がいつ壊れるか、設計寿命は何年かということを分析していたのです。

編集長 そういった研究のかたわら、地域おこしにも携わっているそうですね。

佐藤 金属疲労の研究を重ねていくうちに、都市やコミュニティにも疲労があり、寿命があるということを実感したのです。そして、都市環境や都市問題、都市インフラについて、その問題点の原因を考えるクセがついてしまったんです。そうこうしているうちに、どうすれば地域が抱えている問題を解決できるのかと考えるようになり、実際に活動するようになったというわけです。

編集長 具体的にはどのような活動を展開しているのですか。

佐藤 「地方再生、ローカル鉄道存続、日本酒文化の復権」をテーマに、全国のローカル線の沿線にある酒蔵に声をかけて、全国共通銘柄「鉄の道」を誕生させていくという取り組みを展開しています。09年にはその第1号として、千葉県のいすみ鉄道（大多喜町）とその沿線にある木戸

木戸泉酒造のギャラリー



レトロな雰囲気のいすみ鉄道の車両



泉酒造（莊司文雄社長）とタイアップして「鉄の道」を同酒造から発売しました。

編集長 その取り組みはどういったキッカケではじまったのですか。

佐藤 いすみ鉄道は房総半島の外房に位置するいすみ市大原から内陸の

今秋の電気自動車体験しよう！
大多喜町で電気自動車「i-MiEV」に乗れる！！

乗車無料

「i-MiEV」
 無料乗車のチャンス

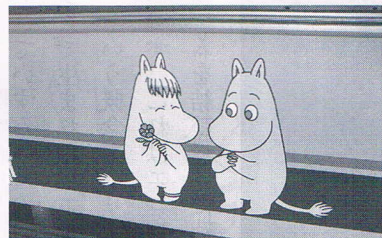
11/10⑨～11/14⑧
 10:00～17:00（最終日は18:00まで）



エコミュージアムツアーでのいすみ鉄道内でのライブ列車（サナオの居場所）



乗車体験中の電気自動車「i-MiEV」



車体に貼られているムーミンの絵

上総中野を結ぶローカル線なのですが、乗客の減少とともに最近では毎年1億円超の赤字を出すようになっていました。すると、経営のコンサルタントまでが「バスに切り替えたほうが経済的だ」というようになり、いすみ鉄道の存続が危ぶまれるよう

になったのです。そんな折、いすみ鉄道ではこれまで大多喜町の町長が社長を兼務していたのですが、08年からは民間から公募することになり、初代社長として吉田平氏が選ばれました。と同時に、地元の大多喜高校の生徒をはじめ、多くの住民がいすみ鉄道の存続運動に熱心に取り組むようになったのです。

実は私もいすみ鉄道の近所に住んでおり、何とか存続させたいと願うひとりでした。というわけで、どうかしていすみ鉄道を盛り上げ、鉄道の存続ができないかと考えるようになったのです。

なお、吉田社長は千葉県知事選挙に出馬するために1年余りで退任し、現在は航空会社出身の鳥塚亮氏が就任しています。鳥塚社長はムーミン列車を走らせるなど、旅客収入以外の収入を得られるような活性化策を展開しています。

全国共通銘柄「鉄の道」でローカル線と地酒をアピール

編集長 地域住民の協力を得る自信はありましたか。

佐藤 大多喜町は城下町だったこともあって、どこか「自分たちのことは自分たちでやる」という気概を持

っていました。そのため、鉄道の存続を目指して一致団結するのは、それほど難しいことではありませんでした。ただ例外に漏れず、大多喜町も少子高齢化が急激にすすんでいる地域です。いずれ通学する学生たちの数が減ってくると、必然的にいすみ鉄道の乗客数が減少するため、今後の鉄道運営が厳しくなることは目に見えていました。そこで、私は住民だけでなく、観光客にも喜ばれるような取り組みを展開できないかと考えるようになりました。

編集長 どうして日本酒とのコラボレーションを考えたのですか。

佐藤 鉄道と同じように、日本酒も衰退傾向にあります。日本酒の場合は若者の日本酒離れが原因となっており、かなり厳しい状態に立たされているのです。それに、鉄道路線の沿線には、どういうわけか蔵元がいくつか点在しています。そこで、鉄道と日本酒を一緒にアピールして、どちらも元気にするにはできないかと考え、この「鉄の道」という共通銘柄の発売を思いついたのです。それで、すぐさま地元の木戸泉酒造に話を持ち込んだところ、莊司社長が熟慮の末、「ふさわしい原酒がある」とノッてくれたんです。

編集長 いすみ鉄道ではどんな日本酒が完成しましたか。

佐藤 どうせならキッチリと地域色を打ち出せるような酒にしようと提案し、アイガモ有機肥料を用いた「いすみ産米」で純米酒を造ってもらいました。「飲み口はさわやかだけど、シツカリと米の風味がする」と評判も上々です。

今後はこれと同じようにして、全国各地で「鉄の道」を造っていきたいと考えています。もちろん、地域が変われば蔵元も変わってくるので、その地域ならではの「鉄の道」が誕生することになります。そうすることで、鉄道ファンや日本酒ファンたちが、地域ごとに醸造される辛口や甘口といった独自の「鉄の道」を求めて、各地を訪ねるようになれば

ば最高だと思っています。

沿線活性化の手法として「エコミュージアム」を実践

編集長 たしかに、それなら地域と鉄道、そして日本酒を同時にアピールし、交流人口の促進につなげることでできそうですね。では、交流人口を拡大していくために、具体的にどのようなことに取り組んでいるのですか。

佐藤 せっかく外から人が来てくれないよ、地元の人たちが「ここには何いけません。そこでいすみ鉄道の沿線では、フランスで生まれた「エコミュージアム」という概念を取り入れようとしています。これはエコロジィとミュージアムを結びつけた造

語で、地域住民が主体となって、その地域固有の文化や生活スタイル、環境を研究・維持しながら、PRするというものです。この取り組みが奏功すれば、観光客たちに満足してもらうことができ、うまくいけばリピーターになってもらうことができます。

私が主催する「洗楓座」という団体では、08年から「房総横断鉄道沿線のエコミュージアム環境整備」というプロジェクトを立ち上げ、自然エネルギーの利用をすすめるながら地域おこしをはかる取り組みを展開しています。09年には「いま話題の電気自動車i・M・iEVにしよう」というイベントを大喜町で開催しました。また、街中で利用できるマイクロ風車システム「クロスゲート」の開発を行い、

街中で当たり前のように風車を活用していくという運動も展開しています。

編集長 そのほか、地域活性化を目指してユニークなポイントカード制度を導入したりもしたそうですね。

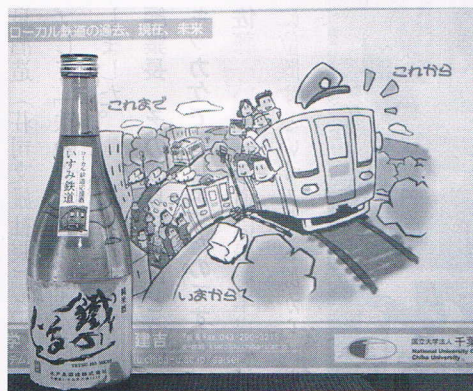
佐藤 (株)サイモンズ

(東京都中央区、斉川満社長) が発行しているサイモンズカード導入しました。このポイントカードの特徴は失効ポイントを地域還元させることができる点です。もちろん、ほかのポイントカードと同様に、貯まったポイントは全国の加盟店で使えますし、航空券や商品と交換することもできます。ただ、期限切れなどで失効となってしまったポイントを地域おこしにかかわる団体やプロジェクトに流すような仕組みになっているのです。そこで、私たちはいすみ鉄道に失効ポイントが流れるようにし、いすみ鉄道の赤字解消に貢献できるような仕組みを取り入れたのです。

編集長 「鉄の道」は今後、どのように展開していくのですか。

佐藤 すでに大阪府貝塚市の水間鉄道などからオフアールが入っています。沿線にある岸和田市の井坂酒造場と協力して、水間鉄道版の「鉄の道」を発売する予定です。こういった事例を増やして、ドンドン地域を元気にしていきたいですね。

編集長 ローカル線と地酒を復活させるためにも、各地でドンドン「鉄の道」を誕生させていってください。本日はありがとうございました。



いすみ鉄道を応援する日本酒「鉄の道」



千葉大学構内にある「クロスゲート」

佐藤 (株)サイモンズ